

2013 June  
Vol.4

松江分自然環境倶楽部通信

# 葦の原

Voshi no Hara

## トピックス

第2回 ヨシ植栽活動を実施

覆砂、浅場造成を実施

腹付盛土延長工事完成

第4回、第5回十四間川環境再生協議会開催

「森の誕生日2013」に出展

子どもたちによるヨシ植栽地清掃と親水活動を実施

BSフジドキュメンタリー番組で活動を放送

## 連載

専門家に聞く 「簸川平野の成り立ちとヨシ原再生の意義」 (第4回)

語り継ぎたい松江分の歴史と生活 その4

## 寄稿

これからは「地域力」 島根県議会議員 池田 一

昭和47年7月豪雨災害の教訓から 出雲市議会議員 伊藤 繁蒔

## 報告

十四間川左岸堤防漏水調査データ

活動の記録 (2013年1月~2013年6月)

松江分自然環境倶楽部

3月3日(日)、第2回目となるヨシの植栽を実施しました。今回は、活動をさらに発展させ、ヨシの植栽に併せ、ヨシが湖水から吸収した窒素やリンなどの有機物を回収して湖の富栄養化を防ぐことを目的に、十四間川下流部の枯れたヨシの刈取り作業も実施しました。

当日は、前日までの悪天候が嘘のように晴れて風もなく、ヨシ植え、枯れたヨシの刈取りには絶好の日和となりました。

今回は、倶楽部会員のほか、十四間川環境再生協議会構成団体や斐川ライオンズクラブ、出東スポーツ少年団、黒目新田自治会などから、前回の153人を上回る160人余りの多数の参加がありました。午前10時から開会式を行い、福田会長のあい

さつに続き、14名の来賓の紹介、来賓代表の池田県議、伊藤市議・宍道湖西岸堤防改修促進期成同盟会長、出雲県土整備事務所舟木部長、出雲市都市建設部江角課長のあいさつ(池田県議は、公用欠席のため松江分自治会長の代読)をいただきました。

続いて、島根自然保護協会会長枚村喜則氏(植物学)からヨシの植栽の意義、効果等について講義を受けた後、ヨシ植え班、枯れたヨシの刈取り班に分かれて、作業を実施しました。ヨシの刈取り作業には、宍道湖の環境保全に取り組まれている松江市環境保全全部環境保全課和久利係長、井川主任にも参加いただきました。



来待石ネットの敷設(3月1日)



セラミックサンドを敷く(3月1日)



ヨシの根の掘り取り(3月2日)



ヨシの植栽(3月3日)



枯れたヨシの刈取り(3月3日)



炊き込みご飯、シジミ汁の昼食(3月3日)

今回の植栽に当たっては、前回の経験や中海でヨシの植栽を行ったNPO法人自然再生センターの増田大橋川・宍道湖部会長のアドバイスを踏まえ、植え付けるための浅場を造成しました。そして、植栽の日の3日前から、江津市の瓦メーカー丸惣から提供されたセラミックサンド(規格外の瓦を1mm~4mmに粉碎したもの)20トンと斐伊川砂を敷き詰めて幅数メートルの浅場を作り、周囲に来待石の端材1トンを詰めたネット状の袋を波除けとして並べ、その間に植え付けることとしました。セラミックサンド、来待石ともに微細な孔や中に含まれるゼオライトによって、水質浄化の効果があるとされているものです。今回のヨシの植栽は、これらの効果の実証実験も兼ねたものとなっています。

多くの人の力を合わせた作業によって11時過ぎには予定して

いた作業を完了し、持田副会長が御礼のあいさつを述べたあと、植栽を記念する大標示板を囲んで記念撮影を行い、今回の活動を終了しました。

その後、松江分研修センターに移動して、倶楽部婦人部による炊き込みご飯、宍道湖漁業協同組合提供及び同婦人部によるシジミ汁とお茶で簡単な昼食を取っていただき、すべての活動を終了しました。

第3回のヨシ植えは、今年秋に実施する予定で、すでに少しずつセラミックサンド、ゼオライトを浅場に敷き詰めたり、来待石ネットを設置したり、準備作業を行っています。次回もたくさんの参加を期待しています。

## abcde fghijklmnop **覆砂、浅場造成を実施** r s t u v w x y z

平成 24 年度の 5,000 m<sup>3</sup>の覆砂に続き、新年度分として 3 月新たに 5,000 m<sup>3</sup>の砂が斐伊川河口から十四間川に運ばれ、浅場造成が行われました。

今回は、平成 23 年に腹付盛土工事が行われた場所の先に覆砂を行い、ヨシが生育し、シジミや小魚などの繁殖場所となるような浅場を作り出すとともに、残った砂を昨年末から今年初めにかけて造成した浅場のまだ不足している部分に投入しました。

この結果、腹付盛土工事が行われた場所の先すべてに浅場ができあがりました。今後、この場所に私たちの手によってヨシを植

栽し、ヨシ原を復元していけば、盛土の流出を防いで堤防の強化につながり、また、シジミなど水産資源の復活や水質浄化など湖の環境改善にも効果があるものと考えています。

また、この下流部の腹付盛土工事のされていない部分の浅場造成については、腹付盛土に先行して整備を行ったもので、この実績をもとに国交省や県、市に対して、腹付盛土の全区間早期完成を要望していくとともに、この場所を利用して、十四間川環境再生協議会とともに覆砂が魚類、ベントス、その他の生物(植物、昆虫、プランクトンなど)に及ぼす効果を調べていくことにしています。



腹付地先への覆砂、浅場造成



腹付地下流部への覆砂、浅場造成



## abcde fghijklm **腹付盛土延長工事完成** r s t u v w x y z

前年度に引き続き、今年度も 2 月半ばから十四間川堤防の腹付盛土工事が行われていましたが、3 月 25 日最後の工程である植生マットによる法面の被覆が行われ、平成 23 年度に行われた箇所の下流部に新たに 30mほどの区間が完成しました。

予算の関係や盛土に使用する土の関係等で、23 年度に比べると短い区間になりましたが、出雲県土整備事務所、出雲市、伊藤市議ほかの関係者の尽力によって、継続して工事が行われた

ことに大きな意義があると考えています。政権が変わり、老朽化したインフラの整備や大規模自然災害対策等の国土強靱化の推進が掲げられており、自然災害防止に係る予算も大幅に増加するようであり、今年度はより長い区間の補強工事の実現を期待したいものです。そして、いつ襲ってくるか分からない集中豪雨災害に備えることができるよう、一刻も早く安心して暮らせるように斐伊川、宍道湖全体の整備が進むことを願うものです。



腹付盛土工事の様子



植生マットが敷かれ完成



## abc **第 4 回、5 回十四間川環境再生協議会開催** x y z

1 月 22 日第 4 回、4 月 9 日第 5 回協議会が松江分研修センターにおいて開催されました。

第 4 回協議会には 17 名の参加があり、各構成団体から平成 24 年度の事業実施報告があり、その後平成 25 年度の事業計

画が検討され、「生物多様性の創出と生育改善及びその効果の持続性の検証」というテーマの下各団体がそれぞれ分担協力して次の 6 つの研究事業に取り組むことが決定されました。

- 1) 土砂採取跡地(浚渫窪地)の修復、環境改善事業

- ・ 斐伊川砂による覆砂効果の検証
- 2) 宍道湖流入河川の水質浄化事業
  - ・ 高濃度酸素水の供給効果検証
- 3) シジミの湖内及びふ化場での飼育実験
  - ・ 塩ビかごによる湖内での飼育実験 ・ ワカサギふ化場での飼育実験 ・ 機能性覆砂材の検証
- 4) 湖底攪拌事業
  - ・ 水流式の湖底攪拌装置による底質改善
- 5) 湖岸ヨシ帯再生事業
  - ・ 浅場造成地へのヨシの植栽 ・ 来待石ネットの設置 ・ 機能性覆砂材(セラミックサンド又はゼオライト)による覆砂
- 6) 環境調査事業
  - ・ 水質調査の実施 ・ 底質調査の実施 ・ 湖底攪拌後の底質調査の実施

また、今年度の事業の成果について、年度内に報告書として取りまとめることが決定されました。

第5回協議会には15名の出席があり、前年度の活動成果を180ページ余の報告書としてまとめたことが報告され、次いで第4回協議会において決定された平成25年度の研究事業の具体的な内容と実施体制について検討、決定されました。

そして、この協議会は、湖岸堤防の安全や湖の環境、水産資源問題に真剣に取り組んでいる地元の松江分自然環境倶楽部と斐川漁業会が中心となっており、これを地元島根県の有力企業である株式会社フクダ、松江土建株式会社、大福工業株式会社の3社が各社の保有する技術をもって支え、NPO法人の自然再生センターと公益財団法人のホシザキグリーン財団が専門的な面から参加し、支援を行うという理想的な組織であり、この体制を有効に機能させ、協議会の目的である生物多様性の創出と生育改善及びその効果の持続性検証という目的を達成するためには、それぞれの団体の活動の連携が今後の課題となること、また、このような活動が成功するためには2年目を迎えた今年の活動が重要となることが確認されました。



第4回協議会の様子



第5回協議会の様子



出来上がった報告書

## 「森の誕生日 2013」に出展

毎年4月29日の昭和の日に松江市宍道町のふるさと森林公園で開催される「森の誕生日」のイベントに今年も出展しました。森と川、湖・海は相互に密接に関わっており、磯焼けや湖の水質悪化には森の荒廃も一因とされるところから、森と川、湖が連携して環境問題に取り組もうという趣旨で十四間川・宍道湖の環境再生、復元に取り組んでいる松江分自然環境倶楽部も昨年からのイベントに参加しています。今年は20周年記念で催し物も多く、好天にも恵まれたところから公園内は多くの参加者であふれました。

認定NPO法人自然再生センター、公益財団法人ホシザキグリーン財団、宍道湖漁業協同組合斐川漁業会と共同で、それぞれの特色を活かした展示、即売等を行い、松江分自然環境倶楽部は、活動の内容を写真や図をパネルに展示するとともにパンフレットや広報誌を配布して、来園者に活動をPRしました。

来年は、これまで以上に多くの方に興味を持って私たちのテントを訪れてもらえるように、展示・配布だけでなく、参加型の催しも加えていきたいと考えています。



多くの来園者であふれる公園内



倶楽部の展示に見入る人



配布物を手に取る人

## 子どもたちによるヨシ植栽地清掃と親水活動実施

6月16日(日)、子どもたちと一緒にヨシの植栽場所とその下流一帯の清掃と親水活動を行いました。

前日の雨の影響で非常に蒸し暑い中、松江分自然環境倶楽部の子ども12人と松江分自然環境倶楽部会員、斐川漁業会の26人が十四間川左岸のヨシ植栽場所に集合し、ヨシの根元や岸辺に流れ着いたゴミを拾いました。1時間ほどかけてヨシの植栽場所からWEPシステムの設置されている辺りまで約800mを清掃し、軽トラック1台分のゴミを回収しました。子どもたちも一所懸命、ヨシの間や岸辺からペットボトル、発泡スチロール、ビニール袋などのたくさんのゴミを集めていました。

清掃活動が終わった後、子どもたちは、浅場の一角で小魚や

エビ捕りをして、自然との触れ合いを楽しみました。驚いて水面から飛び上がって逃げるボラの幼魚に歓声を上げて追いかけて、ボラやナマズ、ハゼなどの幼魚やスズエビ、イサザエビ、テナガエビなどをたくさん捕まえて、子どもたちは大興奮でした。

覆砂によって造成した浅場では、1cm程度まで育ったシジミの稚貝がたくさん見つかり、覆砂の効果が実感できました。

最後に松江分研修センターでみんな一緒に昼食を食べて活動を終了しました。

倶楽部では、今後もこうした活動を継続し、子どもたちに身近な自然に親しんでもらうとともに、宍道湖を愛する気持ち、ゴミをなく環境を汚さない心を育てていきたいと考えています。



## BSフジドキュメンタリー番組で活動を放送 (一滴の向こう側)

5月から始まったBSフジのドキュメンタリー番組「一滴の向こう側」で、6月9日(土)から4週(4話)にわたって、宍道湖・十四間川の環境再生、シジミ資源回復などへの取り組みが放送されました。この番組は、“夢”を“夢”で終わらせず、実現させるために一歩を踏み出し、ガムシャラに頑張る人たちを同時進行で、熱き想いを3~4回の連続もので見せる新たなスタイルの番組で、第2回のテーマとして、かつての美しい自然を取り戻そうと、三重県熊野灘の海の砂漠化現象と宍道湖の水質汚染、シジミ激減に立ち向かう二人の男の挑戦を取り上げ、同時進行で伝えていくという内容でした。

この中で、宍道湖での取り組みについては、十四間川環境再

生協議会の中心メンバーでもある当倶楽部の小村一行事務局長にスポットを当て、アオコの大量発生や水質汚染が深刻化し、シジミが激減していく湖を救うため苦闘する姿を通して、倶楽部や十四間川環境再生協議会が取り組んでいるヨシの植栽、漏水調査や漂着ゴミ清掃活動、清掃覆砂による浅場の造成、ゼオライトを活用したシジミの飼育実験等々が紹介されました。

私たちの小さな挑戦、地道な活動、一滴の汗が、このように様々な形で少しずつ広がっていった、たくさんの方の理解や共感を得、やがて大きな流れとなって、宍道湖の自然が蘇えり、日本のシジミも復活することに繋がればと思います。



「一滴の向こう側」の一場面

私たちの住んでいる地域の自然を守っていくためには、まずは住んでいる地域の特性を分かり、それに応じた適切な対策を考える必要があります。また、そのための具体的な取り組みの一つであるヨシ原再生には、その意義やヨシの生態をよく知ることが大切です。

そこで、私たちの取り組んでいる活動に様々な面からご指導いただいている3名の専門家に、それぞれの専門見地からお話を伺いました。

今回は、中海においてヨシの植栽が行われた認定 NPO 法人自然再生センター大橋川・宍道湖部会長の増田広利先生から、中海でのヨシ植栽の成果と来待石の水質浄化等に係る効果について話していただきました。

## － 最初のヨシ植栽 －

一番最初にヨシの植栽の実験を行ったのは、2010年3月のことで、大橋川の一番中海寄りに架かる中海大橋の付根付近（松江市福富町）です。

ここでは、塩分が濃いということを除けば、ヨシの生育にとって非常に条件のよい場所で、島根自然保護協会会長で植物学が専門の枚村先生から、ここなら間違いなく育つと言われた場所です。塩分がかなり濃いので、この点を心配したのですが、実際に植えてみたらこういう場所でもしっかりとヨシは根付きました。したがって、この程度の塩分についてはあまり心配はしなくてもよいということが分かりました。

植栽するためのヨシですが、松江市の天神川に生えているものを掘り取りました。ここでは、県が管理する場所ですが、ヨシがたくさん繁茂していて、治水少し取り除いた方がよいということで、許可を得て掘り取らせてもらい、現地へ運んで植栽しました。

植栽といっても、実際はバックホウでバケツいっぱいのお塊を掘り取り、その塊を植栽する場所に、上下も何も関係なくドンドンと投げ込んだという感じです。

この方法は、植物学が専門の枚村先生の指導によるもので、特に上下を考えたり、丁寧に植え付けるなどする必要はなく、地下茎の塊を適当に投げ込めばそこから芽が出てくるということです。一つずつ丁寧に植え付けるよりも、なるべく大きな塊として植えることが大切だということだそうです。

5月になってくると水位が上がってくるので、新芽が大きく伸びてくるのですが、このときはヨシとオオクグというこれも地下茎で伸びる水生植物と一緒に生えてきました。どうしてオオクグが混じたのかはわかりませんが、いずれにしても塩分があっても問題なく生育するということが確認できました。



増田大橋川・宍道湖部会長

夏になると、1月、2月より30cm以上水位が上がり、水深40～50cmになることもあります。それでも特に生育に問題はありませんでした。なお、この場所は、後に国交省により工事が行われたため、残念ながら現在は残っていません。

## － 第2回目のヨシ植栽場所の選定 －

最初の実験が成功したので、次に本格的にヨシの植栽実験をやろうということになり、2011年2月松江市東出雲町の意宇川河口付近の荒れた場所で植栽することにしました。この場所を選んだのは、やりやすいところ、条件の良い必ず生えるようなところでやっても意味がないので、場所が荒れていて、塩分も強くて、しかも風も波も強いという最悪の条件のところでも成功すればどこでもできるということになるからです。そういうことで、漁師さんからこんなところに生えるはずがないだろうと言われた場所をあえて植栽場所に選びました。

そして、そういう場所であっても、枚村先生の言われるようなヨシが生育する条件を満たすような場所、つまりは下が泥で水が溜まったところを作って植えてやれば間違いなく生えるだろうと考えました。

この場所は、干拓地が作られる前は辺り一面葦の原だったところですが、写真を見てもらえば解るとおり、干拓によって石で護岸が築かれて、風が吹くと波がザブンザブンと当たるような場所になっています。施工時はもっときれいに護岸が整備されていたはずですが、波で崩れて写真のような状態になっていて、この先は急に深くなっています。見てのとおりとても自然にヨシが生えるような場所ではありません。

ここに比べれば、十四間川は非常に条件がよくヨシの植栽がやりやすいところであるということが分かります。

## － 第2回目のヨシ植栽 －

植えるヨシは、初回と同じく天神川に繁茂しているものを掘り取りました。

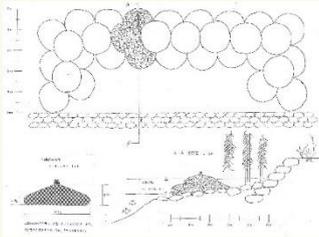


天神川でのヨシの掘り取り



植栽前の状況

それから、来待石の端材1トンを袋詰めにしたものを多数用意しました。この来待石を詰めたネット状の袋を、図と写真で示すようにヨシを植栽する護岸



の外側に、池のような形に三方を囲むように並べました。この中にヨシを植えることによってヨシを波から守るとともに、来待石に含まれているゼオライトが水中の窒素やリンなどを吸着するという水質浄化機能を活用するということが目的です。

ゼオライトは、吸着した窒素やリンを分解するのではなく、ため込むだけなのですが、これを栄養分として取り込むためにそこに海藻類が増殖し、次にその海藻類を餌とする魚がやってくるという食物連鎖の循環が成立することになります。

また、礫間浄化といって、来待石と来待石の間を水が通うことによって水の浄化作用が生じますので、囲っても中の水が淀んで汚れることはなく、ヨシの生育に悪影響を及ぼすようなこともありません。来待石の間を水が出入りすることによって、来待石の持っている浄化機能も働くことになります。

こうしたことのほかに、来待石は、多孔質で他の石に比べて軽く、運搬がしやすいこと、石灯籠などにたくさん加工されていて、端材がたくさん出てくるので、その活用が求められていることなどがあり、利用することにしたものです。

こうして来待石で囲われた中に、天神川から掘り取ってきたヨシの根の入った土をバックホウを使って投げ込みました。これは、ヨシの根を生えていた場所



運搬してきたヨシの荷卸し



植栽場所への植え付けの様子

の土とともに敷き詰めるように植えるのが一番よいという牧村先生の指導によるもので、先に述べたように中海大橋の付根での実験で実証済みの方法です。

作業を行った2月は水位の一番低い時期で、夏場には数十cmも高くなりますので、水面と同じくらいの高さにヨシの根を植え付けました。

そして、4か月後の6月の状況が写真のとおりです。一面に青々としたヨシの葉が出てきています。その後、8月に強風が吹いて、大きな波に洗われたのですが、来待石に守られて土がさらわれてしまうこと

もなくしてヨシは無事でした。ただ、周囲を囲われているため、大きな波に乗って乗り越えたゴミが溜まるということがあって、これは定期的に取り除いてきれいにしてやる必要があります。



生えそろうたヨシ(2011年6月)



強風による荒波にも耐えたヨシ

最初に言ったように、植栽の場所は、十四間川と比べるとはるかに厳しい条件のところですが、それでもこうして無事に育ちますので、十四間でも間違いなく成功すると思います。

それから、この強風の時に目立ったことは、外の水の色と中の水の色が全く違っていったことです。来待石の間を水が自由に通り抜けられますから、本当は中も外も同じ色でないといけませんが、実際は、外は波の影響で濁っているのに対し、中はきれいで透明度が全く違いました。それほど浄化機能があるということを実感しました。

反省点としては、完全に来待石の袋で囲ってしまったため、小魚などが中に入ってこれなくなった点です。少し径の太い塩ビパイプなどを何か所かに通しておけば、そこを通過して小魚が行き来をすることができるようになり、もっと自然に近い形の小魚などの生息場所にもなったと思っています。十四間川でヨシの植栽を行われる際は、こういったことも考慮されるとよいと思います。

ヨシを早く根付かせ、繁茂させるためのポイントとしては、ヨシの根や根元の土が波にさらわれないようにすること、ヨシが自由に地下茎や根を伸ばせるような植え方をしてやること、地上部が枯れる冬季は水が被らなくなっても差し支えないが、それ以外の季節は40~50cm程度までの水に浸かるように高さを調整して植えることなどが重要だと思います。

そして、できれば波除けに水質浄化が期待される来待石を用いてヨシの水質浄化機能との相乗効果を狙ったり、小魚やエビなどの棲み家、隠れ場所となるような工夫もしたりすると一層よいのではないかと思います。

十四間川についていえば、出雲空港にも近く、景観も優れた場所にあるので、ただヨシを植えるだけではなく、もっと人が自然に親しめる場所にしたらいのではないかと思います。たとえば、腹付部分を含めて公園のような感じに整備して、水辺に降りる階段などもつけたらどうでしょうか。そして、この階段を島根の伝統工芸品である来待石を利用してもらえば、地元の伝統産業の継承と水質浄化にもつながり、一石二鳥の効果があるのではないかと思います。

## 語り継ぎたい松江分の歴史と生活 その4

昭和47年7月12日に発生した大水害、通称「47水害」により、宍道湖岸に位置する松江分自治会はたいへんな被害に遭いました。災害からもう41年も経過し、その時のことを生々しく覚えている人は50歳以上の方ということになり、この災害自体を知らないの方が多くなりました。そこで、今回は、この大災害の記憶を風化させず、今後再び襲ってくるかもしれない水害に備えるため、47水害を体験された持田進さん(当時29歳)にその時の状況を語っていただきました。

## 47水害 その時わたしは

2日前の7月10日から降り出した雨は、やみ間もなく降り続いていました。激しい降り方が心配でしたが、一方でこんな降り方がそんなに長く続く訳がないと高をくっていました。しかし、雨は一向に収まる様子も見えず、翌日になっても降り続いていました。今と違って天気予報もそれほど詳しくありませんでしたので、「よう降るなあ」と思う程度で、まさかの事態が起こるとは思ってもいませんでした。しかし、午後になってもやむ気配がなく、宍道湖の水位がかなり高くなっているという話を耳にしましたので、これはいけないと思い、仕事を午前で切り上げて家に帰りました。

地元に戻ると、近くの五右衛門川に人が集まっていた。水位がかなり高くなっていて、土嚢を積まないといけないのではないかという話になっていたようです。自分もそれに加わろうと思ひ、妻に畳や電気製品を2階に上げておくように指示して出かけました。3歳の娘と5ヶ月の息子のことが少し気になりましたが、2階に居ればとりあえず大丈夫だろうと自分を納得させて堤防に向かいました。

現場に着くと、川の水量が一段と増えているのが見えました。広い範囲で雨が降っているとのことだったので、山に降った雨も加わり宍道湖にはかなりの水が流れ込んで来ていたのでしょう。ただならぬ気配が漂っていましたが、暗くなってきたのでとりあえずその日は解散になりました。

次の日も早朝から、排水機のあるところ集まりました。排水機能力を超えて水が出ているようで、すでに田んぼは水に浸かってしまっており、五右衛門川はまだ溢れていませんでしたが、排水機場には膝下くらいまで水が来ていました。ここまで水が増えればもうどう手の打ちようもないと判断され、排水することをあきらめて、排水ポンプが水に浸かって壊れてしまえば、増水が収まった後に排水することができなくなるので、なんとかポンプ



十四間川から中央排水機場を望む

だけは守ろうということになりました。モーターを止めても湖の水の圧力で逆転を続けるポンプとモーターを皆で力を合わせてなんとか切り離し、モーターをチェーンブロックで吊り上げて水を被らない場所に移動させました。逆流で回転するポンプに楔の役をする大きな材木を差し込んで回転を止め、その間にモーターの切り離しを行ったのですが、これはまさに命懸けの作業でした。普段では恐ろしくて疎んでしましますが、このときはみんな必死の思いでした。

この後、もう解散しようと決まりました。排水ポンプは使えなくなり、堤防に積む土嚢もどンドン範囲が広がり、とても対応できなくなって、後は成り行きに任せるしかないという状況になったからです。各々が家族の待つ家に帰って行き、私も、妻にこの状況を早く話そうと、家路を急ぎました。稲も青々と順調に育っていましたが、もう収穫を期待できないと残念な気持ちで、水没した田んぼを見ながら家に帰りました。

家に着き、玄関を開けたその時です。「ゴー」という激しい音がしました。そして、

みるみるうちに水位が上がってきて、あっという間に床上まで水がやって来ました。家の近くの十四間川の堤



決壊した十四間川堤防(奥が松江分地区)

防が決壊したのです。すぐに2階にかけ上がり、外を見渡すと宍道湖が全てを飲み込み、家だけがポツンポツンと見えるという今まで見たこともない風景が広がっていました。私も妻も呆然としていましたが、何も分かってない3歳の娘だけがきゃっきゃと楽しそうに騒いでいたのを覚えています。

堤防が決壊したのは昼過ぎだったと思いますが、宍道湖に近いほうから順に救助が行われていたようで、私たちの家に救



湖と化した松江分地区内(昭和47年7月13日撮影)

助隊の舟が来たのは夕方になってからでした。とりあえず妻と二人の子どもだけを舟に乗せて、私は家を守りたいという気持ちから、一人だけ家に残りました。近所の家も男一人は家に残っていたそうです。しかし、その後避難指示が出て、誰も家に残れないことになり、舟で斐川東中学校の体育館に避難しました。妻と子どもも体育館にいましたが、いろいろと不便が多いので、被害に遭っていない親戚の家に預けることにしました。配給があつて食べ物には困りませんでした。体育館の固い床での雑居や夏の暑い時分でお風呂に入れないことにとても辛い思いをしました。毎年各地で起こる豪雨災害や一昨年東日本大震災の避難風景が映し出されるたびに、その時の辛い記憶が鮮明に蘇ってきます。

体育館には1週間ほどいましたが、一刻も早く家の状況を確かめ、片付けたいとの思いが募り、また泥棒が出るとの噂もあったので、家に帰りました。その時でも、膝くらいまで水は残っており、なかなか片付けも思うようにはできませんでした。



船で片付けに通う(松江分地内)

完全に水が引いたのは2週間くらい経ったころだと思いますが、どこの家も壁が落ちたり、車、農機具、電気製品をはじめいろいろな物がだめになるなど様々な被害が聞かれました。そのとき、二度とこのような目には遭いたくないということと私たちにとって堤防が命なんだということを肝に銘じました。



水が引いた後の家の内部



復旧作業の様子



十四間川決壊箇所への復旧作業

参 考

昭和47年7月豪雨の被害状況(昭和47年7月18日現在)

摘 要	員 数	金額(千円)	備 考	摘 要	員 数	金額(千円)	備 考
<b>建物関係</b>				豚	800頭	22,000	
床上浸水	644戸	892,500	1,945棟	鶏	3,000羽	1,950	牧草、飼料など
床下浸水	478戸	241,000		その他		11,630	
その他非住家		386,960		<b>農機具</b>	1,138台	5,821	
<b>土木関係</b>				<b>山林関係</b>			
河 川	50か所	7,492		林地崩壊	27か所	16,011	
道 路	77か所	13,973		林産物	2,200kg	210	
<b>農地関係</b>				<b>水産関係</b>			
水路	114か所	28,964		船	13隻	910	
揚水機	80か所	22,000		漁具		12,000	
道路	91か所	20,089		<b>教委関係</b>	2か所	3,040	
橋 梁	6か所	11,330		<b>有線放送関係</b>		4,000	
他		11,015		<b>農協関係</b>		30,000	
<b>家畜関係</b>				<b>商工業関係</b>		57,070	
畜 舎	150棟	30,000		<b>水道施設</b>	6か所	104	
乳 牛	120頭	20,000					
肉 用 牛	200頭	33,000		<b>合 計</b>		<b>3,477,245</b>	

(斐川町農林事務局調査)

「斐川町史 その後(一)」より抜粋

# これからは「地域力」

島根県議会議員 池田 一

松江分自然環境倶楽部の皆さん、日ごろの様々な活動、大変ご苦労様です。皆さんの真剣で地道な活動にはいつも感心して参加させていただいています。その機関紙である「葦の原」に、この度初めて寄稿させていただく事になりました。大変うれしく思います。ありがとうございます。

さて、松江分自然環境倶楽部の活動は、本当に地に足のついた立派な活動だと思います。まず、地域の皆さんで現状の問題点を探り、その調査を自分たちでやり、問題を解決するためにどうしたらいいか、みんなで考え、行動する。また、様々な勉強会を通じて本当に効果のある対策を練って、自分たちで出来ることは自分たちで進め、行政その他の機関にお願いすることはしっかり訴えていく。まさに住民活動の鏡とも言えるものです。

私は仕事柄、県内各地を回ります。島根県は過疎・高齢化が進む広い面積の中山間・離島地域を持った県です。そういう厳しい環境にある地域に行くと、必ず感じる事があります。それは「地域力」の強さです。危機感があればこそ、地域の「絆」は深まっていきます。自分たちの力で助け合っていないと、生きていけないからです。

益田市匹見町。皆さんもよく知る過疎・高齢化先進地域です。人口は1500人。最盛期の1/5しかいません。高齢化率50%のこの地域に「萩の舎」という郷土料理をふるまい、地元の食材を加工販売しているお店があります。会社の社長は齊

藤ソノさん。もう90歳近いおばあちゃんです。何とか地域の人々の暮らしを豊かにしようと、70歳を過ぎてから仲間と一緒に郷土料理と加工品を売る店を始めました。今では地元ばかりでなく、広島、山口から沢山のお客さんが訪れています。「みんながいたわりながら、家族みたいに助け合って、支えあって生きている。」と、斉藤さん。一番大変なブルーベリーの収穫作業も、若い人も足腰の弱い年寄りも時給は一緒。「年寄りはそれ相応に。元気なもんが働きたい。」いたわる気持ちが生きています。

今の日本、確かに厳しい時代なのかもしれません。しかし、生活の厳しい中山間・離島のように、みんなで助け合い、生きていけば、そこに暮らすことが出来るのです。「地域の事を自分たちで考え、出来る事は自分たちでしょう」このような取り組みこそが地域の力を育て、強めていくと思います。

松江分自然環境倶楽部の活動は、まさしくそのような活動です。地元の皆さんに出来ることをやっていたら、行政がしっかりフォローする。大変理想的な事業の進め方であり、地域活性化のお手本です。島根県として、これからもしっかり支援していきたいと思います。

松江分自然環境倶楽部の今後ますますのご発展を心より祈念いたします。



## 寄稿

# 昭和47年7月豪雨災害の教訓から

出雲市議会議員 伊藤 繁満

5月は水防月間で、その標語は「洪水から守ろうみんなの地域」でした。本格的な梅雨入り前に、入念に堤防の点検等が行われてきました。しかし、このところの天気状況は連日の暑さで降雨もなく、あまりにも長期間に及ぶ渇水状況に今年は空梅雨になるのかな、と想いを巡らせながらの日々です。

さて、斐伊川治水事業3点セットの一つである斐伊川放水路事業が多くの皆さまの深いご理解と多大のご協力により6月16日には完成式が行われることとなっています。上流の2か所のダムは既に完成していますので、残るのは下流の大橋川の改修のみとなりました。

宍道湖西岸堤防改修促進を要望し活動を再開しつつある中で、災害の危険性を少なくするうえでも放水路事業の完

成は斐川町住民にとり大きな喜びであります。

地域の安全、安心が高まる中で治水安全度が更に向上していくためには大橋川の改修が是非とも必要であり、斐伊川と宍道湖に囲まれている斐川町の地域は西岸堤防そのものが、まさに生命線であります。

昭和47年7月豪雨の状況について広報では、以下のよう

【7月9日夜から11日にかけての集中豪雨447ミリを記録し山間部で降り続いた雨で宍道湖の水が増



水し、逆流するという最悪な事態になりました。

10日夜の宍道湖の水位は定点(海拔0メートル)から2m3cmも高くなり昭和39年災害の1m87cmを上回り、明治36年の2m73cmに次ぐ二番目の記録となりました。】

注目しておきたいことは逆流現象による堤防決壊が大災

害に繋がったということで、改めて記憶にとどめておきたいものと思います。

40年が過ぎて当時の状況を知る人は少なくなりつつありますが、危機管理体制の強化が不断の努力として行われ、住民の安全、安心が確保され、暮らしやすい、住んで良かったと言える地域になりますように心がけていきたいものであります。

# 報告

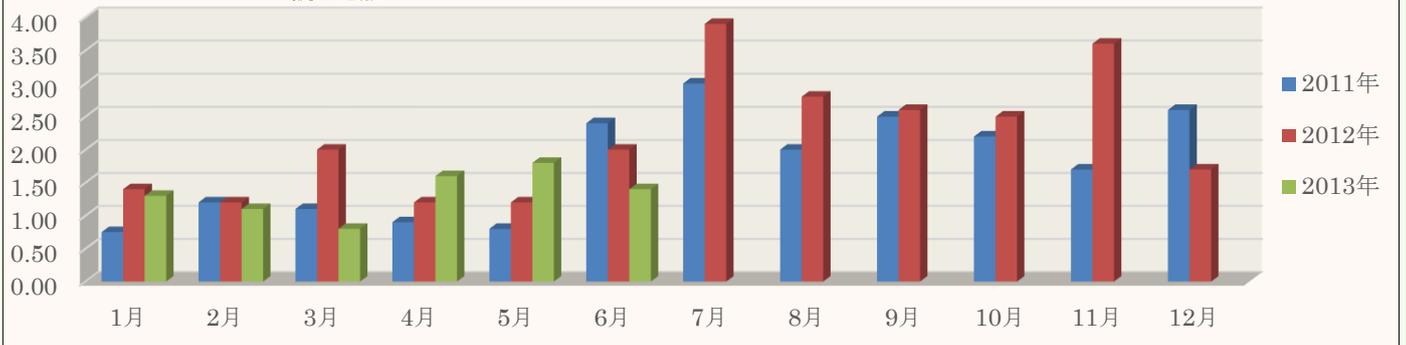
## 十四間川左岸堤防漏水調査データ (2011年1月～2013年6月)

十四間川水位 (cm)

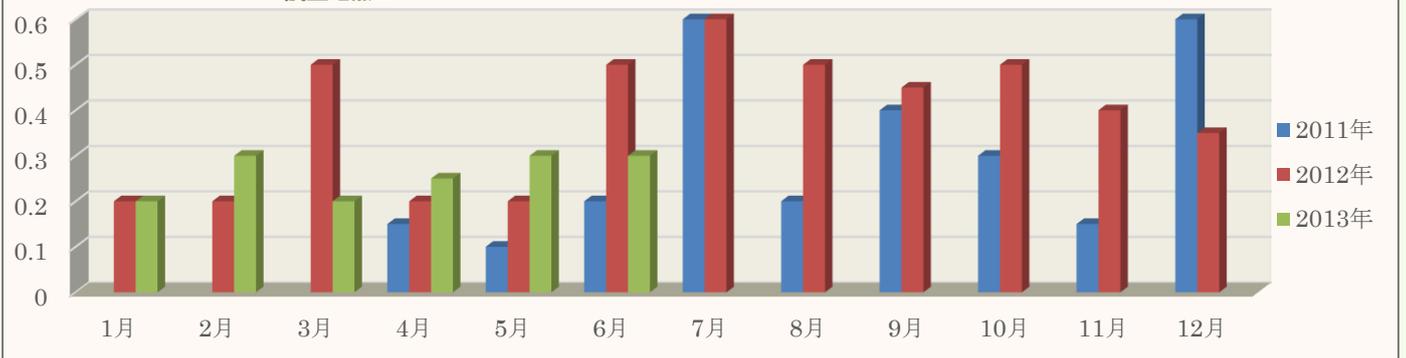


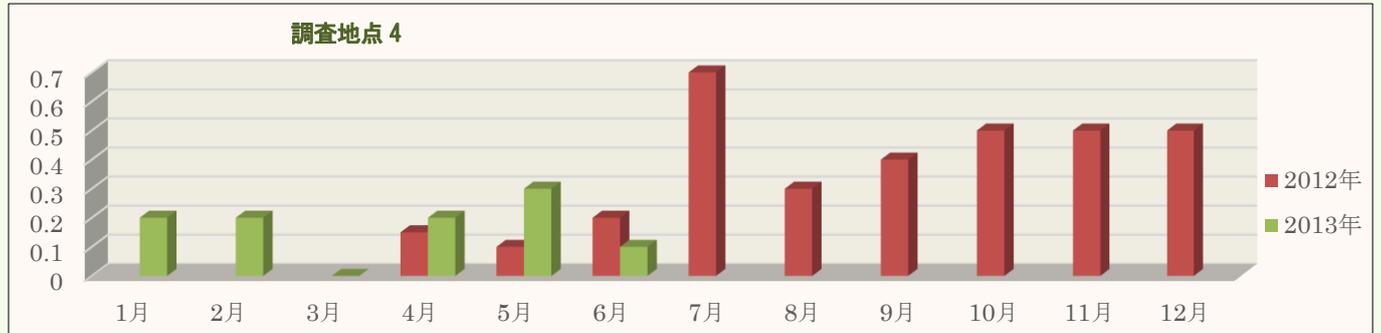
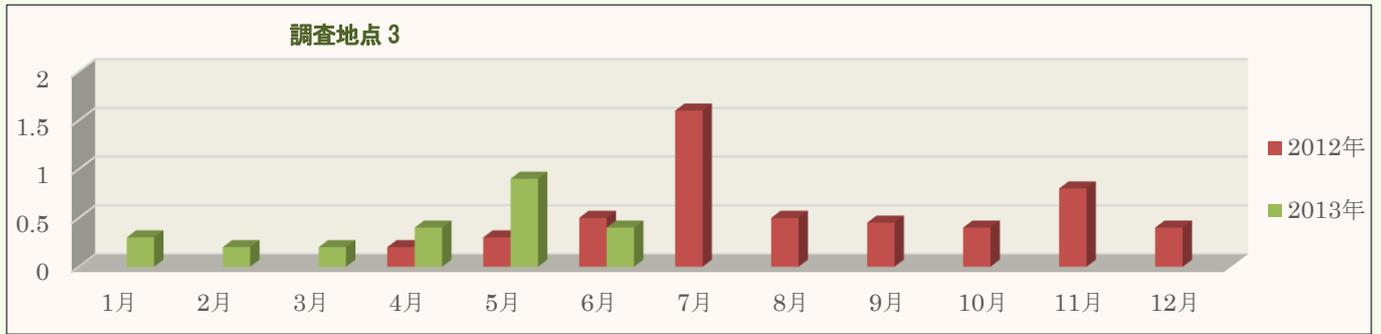
漏水量 (ℓ/分)

調査地点 1



調査地点 2





## 活動の記録(2013年1月~2013年6月)

### 1月

- ・漏水・ヨシ生育状況調査
- ・第4回十四間川環境再生協議会開催
- ・役員会開催

### 2月

- ・漏水・ヨシ生育状況調査
- ・第2回ヨシ植栽活動役員・全員打合せ
- ・ヨシ植栽準備作業実施
- ・腹付盛土工事開始

### 3月

- ・漏水・ヨシ生育状況調査
- ・ヨシ植栽、ヨシ刈取り活動実施
- ・覆砂、浅場造成実施
- ・腹付盛土工事平成24年度区間完成
- ・ヨシ植栽活動等慰労会兼倶楽部懇親会開催

### 4月

- ・浅場造成作業実施
- ・漏水・ヨシ生育状況調査
- ・第5回十四間川環境再生協議会開催
- ・森の誕生日 2013 に出展

### 5月

- ・総会開催
- ・漏水・ヨシ生育状況調査、ヨシ植栽場所清掃実施

### 6月

- ・漏水・ヨシ生育状況調査、ヨシ植栽場所清掃実施
- ・十四間川堤防除草作業実施(地域一斉清掃の一環)
- ・子どもたちによるヨシ植栽場所清掃及び親水活動開催
- ・WEP システム本格稼働
- ・ヤマトシジミ飼育技術勉強会開催

### 《編集後記》

最近、一年が早くなった、あっという間の一年だったとよく言われますが、半年に1回と決めた広報誌「葦の原」の発行は、月日の経つのがいかに早いものであるかということを感じさせてくれます。無事期限内の発行を果たしてほっとしながら、これでしばらくのんびり過ごせるなど思えるのもほんの束の間で、あっという間にまた編集・発行の時期が近づき、焦りと呻吟の日を過ごすことになります。そして、第4号ともなると、マンネリ化との戦いも生じてきました。まさに産みの苦しみです。

それにも耐えて、どうやら今回も期限内にお届けすることができました。解放感に浸りながら手に取ってみれば、今回もああすればこうすればと不満だけが目につきます。が、所詮これが能力の限界と納得するしかありません。それにも拘わらずお読みいただけることにただ感謝です。

松江分自然環境倶楽部通信 葦の原 (Yosai no Hara) 第4号

発行日/平成25年6月28日

発行者/松江分自然環境倶楽部

広報誌編集委員会

事務局: 〒699-0553 出雲市斐川町黒目 1784

Mail: matsuebun@mail.goo.ne.jp

印刷・製本/武永印刷株式会社

《ホームページ》

<http://matsuebun.org>

松江分自然環境倶楽部

検索